

令和 元年 6 月 14 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03383

研究課題名(和文) ケンブリッジ学派の経済思想と優生学

研究課題名(英文) Economic Thought of Cambridge and Eugenics

研究代表者

山崎 聡 (Yamazaki, Satoshi)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：80323905

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ピグーを中心として、ケンブリッジ学派の経済思想と優生学の問題を考察した。当時興隆し、一躍時代を席卷した優生思想であったが、経済学者の対応は必ずしも理路整然としたものではなかった。多くが優生思想固有のイデオロギーに染まっていた中において、ピグーは倫理的見地から優生思想を牽制し、科学偏重主義に対しても警鐘を鳴らすなど、当時の経済学者としては出色の論陣を張っていた。ケンブリッジ以外でピグー同様の論調を見せていたのが自由主義者ホブハウスであった。本研究は、両者の異同についても分析している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

優生学といえば、かつて世界を恐怖に陥れた悪の極北のイデオロギーとして、今日では蛇蝎のごとく忌み嫌われている。ここでは、優生学勃興および同時代の経済学者らの思想を考察する。現代的視点では容認できないように見えても、当時としては、優生主義のある側面に対しては社会的なニーズが存したことも事実である。本研究は、経済学者の目を通じて、何が当時問題となっており、何故に優生思想が浸透していったのかを追究する。今日でも、実は優生思想は潰えていない。過去のみならず、現代の問題を考えるための歴史的な知見の一端を提供する。

研究成果の概要(英文)：This project examines the problem of eugenics and Cambridge school of economics, centered on Pigou. As is well known, eugenics was given birth to and rapidly became the epoch in the days, which economists, however, failed to confront squarely. While most of them were tainted with the peculiar ideology residing in eugenics, Pigou exceptionally tackled eugenics from his firm ethical viewpoint, and articulately admonished scientists inclined to the ideology not to trespass unduly on the realm of ethical reasoning which defines people's welfare. In that sense, he was a leading economist. A liberalist, Hobhouse likewise presented a similar notion outside Cambridge. We also inquire similarities and dissimilarities between them.

研究分野：経済思想

キーワード：厚生経済学 ケンブリッジ学派 倫理学 優生学

1. 研究開始当初の背景

現代においては、その名を口にすることすら躊躇われる感がある優生学(思想)であるが、学問においては依然として議論の対象であり続けている。特に倫理学、政治社会思想、科学史の領域においてはそうである。既に優生学に関しては膨大な研究蓄積があるが、代表的な文献の一部を列挙しよう。ケブルズ(*In the Name of Eugenics* 1985)は、イギリスおよびアメリカにおける優生思想全般に関して考察したもの。サール(*Eugenics and Politics in Britain 1900-1914* 1976)およびマッケンジー(“*Eugenics in Britain*” 1976)は優生学発祥の地イギリスを中心に、優生運動の萌芽と初期の様相を考察したもの。マズムダール(*Eugenics, Human Genetics and Human Failings* 1992)は、優生学を集団、組織、協会という観点から考察したもの。フリーデン(“*Eugenics and Progressive Thought*” 1979)は、優生運動の多様な側面(リベラル、保守、社会主義との親和性)に関して考察したもの。米本ほか(『優生学と人間社会』2000)は、各国別の優生思想と運動について考察したもの。このように、社会思想史、科学史の領域における優生学研究は豊富にあるが、こと経済学史・経済思想においては、優生学が扱われることは非常に少ないのが現状である。少ない中でも最近の研究に、パート&レヴィ(“*Denying Human Homogeneity: Eugenics & the Making of Post-Classical Economics*” 2003)がある。経済学者(新古典派)に対する優生学の影響を考察したもので、経済学史研究としては珍しい。ゴルトンやピアソンの優生学的文献の重要性が、経済思想研究の文献において無視されてきたことは奇妙であるとパート&レヴィは述べているが、それは全く事実であり、歴史上の経済学者たちが優生思想に対してどのような態度を取ったか、彼らの経済思想・政策論に対してどのような影響を与えたかという観点から追究したものは殆ど皆無とあって差し支えない。大著『経済分析の歴史』(1954)でいみじくもシュンペーターが「生物学的研究の結論を社会現象に応用することは、この期間の思想の中にもあまりにも大きく表出していたので、これを全く無視するわけにはいかない」と述べているにも拘わらずに、である。こうした状況ではあるが、私は、ピグーを中心に経済学史を研究する者として、拙著と拙稿『ピグーの倫理思想と厚生経済学』(2011)、「創設期の厚生経済学の一側面：ピグーと優生思想」(2014)において当時の背景を概観した上で、ピグーと優生学の問題を精察した。こうした作業は、創設期の厚生経済学の新たな側面に光を当てるものとなったといえる。

2. 研究の目的

本研究は、従来の国内外の経済学史研究では殆ど取り上げられてこなかった優生学と経済思想の問題を扱う。19世紀後半に誕生し、20世紀の幕開けとともに興隆した優生学は、弱者救済の慈善事業、再分配を目指す福祉国家論に対して非難の矛先を向けた。何故なら、それらによって自然淘汰が抑制され、望ましくないストックが増殖し(人口構成比悪化)、国家衰退が惹起されるからであった。こうした時代の優生学的懸念に対して、当時の経済学界をリードしていたケンブリッジ学派の経済学者たちがどのような態度を取ったかは解明すべき大きな課題である。その解明のため、ケンブリッジ優生協会を中心とした当時の時代背景、上記学派の経済、政策、福祉(倫理)の思想と優生学との関連を追究する。

3. 研究の方法

研究の方法としては、通常の経済思想の研究方法に則る。つまり、原典による引証および再構成である。解釈の主体が変われば、新たに構成される可能性が生まれてくることから、一次文献や書簡等を含めた多くの資料に当たり、テキストに対して別の光を当て、新たな解釈を提出する。本研究では、ケンブリッジ学派を構成する経済学者たちの公刊された論文や著書の叙述のみならず、未公開の書簡、草稿、メモというようなものも必要に応じて参照する。また、研究領域が関連する研究者たちと情報や意見を積極的に交換しながら、有益な知見を得ることに努める。そして、研究がある程度進んだ段階で、ワークショップや学会において研究報告を行い、内容の反省と研鑽を重ねていく。そうした過程を経て、学術論文として完成させ、学術誌に投稿することを通じて学問的貢献を為してゆく。

4. 研究成果

ゴルトンの影響により設立されたイギリスの優生(教育)協会であるが、その余波を受け、有力な支部としてケンブリッジ大学においても、ケンブリッジ優生協会が立ち上げられた。ケンブリッジの経済学者としては、主にケインズがコミットしていたが、師マーシャルも永久会員の申し込みを行うなど、強い関心が伺われる。実際、マーシャルは優生思想的な側面を垣間見せており、かつ(今日の感覚からすると)人種差別的な発言も主著『原理』の各所で行っていた。しかしながら、それは確固とした倫理的見地からのものとはいえず、恐らくは、マーシャルにあっても、シュンペーターの論難(当時多くの経済学者らはイデオロギー的の偏見を露呈した)から逃れられないであろう。またケインズも、自身の著書で積極的に優生思想を展開しなかったが(彼の主眼は人口の質よりもサイズであった)、優生協会の会計官を務めるなど、時代のイデオロギーに加担したことは間違いない。

ところが、同じケンブリッジ学派に属していながらも、ピグーは相当に異なる様相を見せた。彼は、自身の確固とした倫理的見地から優生学に内在するイデオロギーを看破し、優生学者た

ちが目の敵にした弱者救済の福祉政策を理論的に擁護した。その論理武装として特に重要なのが、倫理と科学との論理的峻別の視点、遺伝と環境による改善の同等性、環境が世代を超えて持続すること、および、それによる改善の永続性である。ともすればエリート主義のウイルスに容易く感染し、イデオロギー的要素を露呈した当時の多くの経済学者の中であって、ピグーのこうしたスタンスはまさに出色であったといえる。この点に対して高く評価するのはシュンペーターだけではない。敵将であったレナード・ダーウィンですら、次のように賞している。「私が知る限りにおいて、〔ピグーは〕経済学との関連における優生学に対して真剣に刮目した殆ど唯一の経済学者である」と。

また、対象をケンブリッジ学派から広げてみると、例えば、自由主義者ホブハウスも時代の優生主義的イデオロギーに理性的に対抗したことが明らかとなった。上記のピグーの論理武装とほぼ匹敵するメリットをホブハウスも持ち合わせていたことが分かった。ピグーの倫理的基礎は功利主義にある一方、ホブハウスのそれは自由主義である。道徳原理は異なれども、優生学に内在するイデオロギーに真正面から抵抗したことは興味深い。これを説明する一つの手掛かりとしては、ミント(1948)による指摘、つまり、当時としては、狭い学派や主義を超越した、「人道主義の広汎な伝統」による影響が考えられ得る。こうして、少なくとも、ピグーやホブハウスらは、時代の優生主義に染まることなく、「当時としては」良心家であった。

しかしながら、本研究は、上述の学者らの美談では終わらない。優生思想を評価するパースペクティブを現代にまで拡張することで、それぞれの時代の優生思想を相対化することが可能となる。例えば、ある時代、ある地域において、その当時の思想的位相としては、非優生主義と看做されていたとしても、超時代、超地域というパースペクティブで思想を評価すると幾分異なった解釈となる可能性がある。本研究で取り上げているケンブリッジ学派の中核の一人、ピグーが(およびホブハウスらも)それに該当することが明らかとなりつつある。

(若干上でも触れたが)当時のピグーは、厚生経済学者の旗手として、社会改良、しかも社会の弱者、貧者の福祉を向上させることで、一国全体の厚生を増進させようと奮闘していた。その主眼は、教育や労働衛生といった環境改善に存していた。だが、当然ながら、当時台頭した優生思想はこれに真っ向から異を唱えるものであったし、事実、環境改善に重きを置く、厚生経済学には論難の矛先が真っ先に向けられた。これが当時のコンテクストであり、ピグーは優生思想と真正面から対峙することとなった。

とはいえ、ピグーは、先天的な疾病遺伝については、これを断固として場合によっては社会的な力を行使してでも阻止しなくてはならないと力説していた。もちろん、その動機は、純粹に人々特に将来世代の幸福への真摯な配慮にあり、決してエリート主義的、帝国主義的な(当時の典型的な優生主義に内在した)イデオロギーの類ではなかった。そうした、遺伝疾患の予防は、当時としては、医学関係者の間では常識といって良い通念であり、ピグーもそれを奉じていただけであった。

ところが、上述のように、拡張したパースペクティブからすれば、当時の、殊更優生思想には与しないと思われた、常識に対してですら、厳しい評価が与えられる。トロンブレイ(1988)によれば、「当時」の医療関係者の殆どは多かれ少なかれ「優生主義者」とされる。ピグーも決して例外ではないことになる。当時としては「良心家」、だが現代では悪の権化とも看做されるというギャップをどのように理解すべきかは今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

(1) 山崎聡 Pigou's Theory on Welfare Economics in the Narrow and Broader Senses based upon the Indirect Utilitarian Strategy, The Conference Volume of ISUS2018, 2019 年刊行予定(要旨査読有)。

(2) 山崎聡 「L.T.ホブハウスと優生学」高知大学教育学部研究報告 78 号, pp.331-341, 2018 年(査読無)。

(3) 山崎聡 「優生学の「検死」と功利主義」高知大学教育学部研究報告 77 号, pp.253-262, 2017 年(査読無)。

(4) 山崎聡 Pigou's Welfarism Revisited: the Possibility of Non-Welfarist and Non-Utilitarian Interpretation, International Workshop 2017 Supported by Grants-in-Aid for Scientific Research (A): "Economic Thought of Cambridge, Oxford, LSE and the Transformation of the Welfare State" カンファレンスペーパー pp.23(web 媒体), 2017(査読無)。

(5) 山崎聡 Reexamination of Pigou's Welfarism: A Non-Welfarist Approach?, International Workshop 2016 Supported by Grants-in-Aid for Scientific Research (A): "Economic Thought of Cambridge, Oxford, LSE and the Transformation of the Welfare State" カンファレンスペーパー pp.24(web 媒体), 2016(査読無)。

(6) 山崎聡 Pigou and Eugenics Revisited, 第 14 回国際功利主義学会 ISUS14 カンファレンスペーパー pp.23(web 媒体), 2016(要旨査読有)。

(7) 山崎聡 「なぜ「主流派経済学」は「主流派」になったのか」『経済セミナー』増刊号, pp. 28 - 31, 2015 年(査読無)。

〔学会発表〕(計 4件)

(1) 山崎聡 “The possibility of Indirect Utilitarian Strategy in Pigou’s Welfare Economics” 国際功利主義学会 ISUS (ドイツカールスルーエ工科大学) 2018年7月24日.

(2) 山崎聡 Pigou’s Welfarism Revisited: the Possibility of Non-Welfarist and Non-Utilitarian Interpretation International Workshop 2017 Supported by Grants-in-Aid for Scientific Research (A): “Economic Thought of Cambridge, Oxford, LSE and the Transformation of the Welfare State”(フランス ニース Le Saint-Paul), 2017年3月18日.

(3) 山崎聡 Reexamination of Pigou's Welfarism: A Non-Welfarist Approach? International Workshop 2016 Supported by Grants-in-Aid for Scientific Research (A): “Economic Thought of Cambridge, Oxford, LSE and the Transformation of the Welfare State”(一橋大学), 2016年9月6日.

(4) 山崎聡 Pigou and Eugenics Revisited, 第14回国際功利主義学会 ISUS14(フランス リール・カソリック大学), 2016年7月7日.

〔図書〕(計 1件)

(1) 山崎聡・高見典和

「ケンブリッジの厚生経済学」西沢保・平井俊顕編『ケンブリッジ知の探訪』(全394頁)第3章(pp.89-132), ミネルヴァ書房, 2018年, ISBN:9784623081035.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。